誰もが分かる，できる授業を目指して

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系
教員養成特別コース　　実習責任教員　川　上　綾　子
中　村　　嶺　　実習指導教員　葛　上　秀　文

キーワード：分かる授業　できる授業　児童の思考

1．課題設定の理由

学部時代に筆者は，福祉実習などで障がいのある児童や塾講師をしていた関係からたくさんの児童と関わる機会があった。そこで感じたこととしては，児童一人ひとりには人間関係や勉強の問題などそれぞれ違った背景があり，悩んでいることも違うことである。筆者は，このような経験を通して，児童に学校の中で，児童の居場所となる学級をつくりたいと考えた。そして，障がいのある児童とない児童がともに同じ場で学ぶことができるインクルーシブ教育の実現に興味をもった。

「教職協働力実践演習」の授業において，5年生と1年生の算数と国語の模擬授業を行った。その活動を通して，各学年における児童の思考に沿った授業づくりを行うことの必要性や教材研究の重要性について学ばせていただいた。この「教職協働力実践演習」を通して，筆者が学部時代に研究をしていたインクルーシブ教育を踏まえた授業実践について，もう少し深く研究してみたいと感じるようになった。

基礎インターンシップにおいては，2年生への配属となった。そこでは，算数の授業実践を行った。授業を通し，課題が3つ見えてきた。筆者は，ゼミの先生から薦められていた本でもある「授業のユニバーサルデザイン入門」という本に出会った。その本の中で著者は「学校教育のユニバーサルデザインというのは，発達障害がある子だけでなく，すべての子にとって参加しやすい学校，わかりやすい授業」であると述べている。この本を通して，著者は大学院での研究主題を「誰もが分かる，できる授業を目指して」と設定するに至った。

2．授業実践及び分析・考察

(1)基礎インターンシップの授業実践

i）授業の概要

第2学年算数科「三角形と四角形」の授業を実践した。本時では，直線で囲んだ形の仲間分けを通して，三角形と四角形の定義づけをし，その定義をもとに，点構成，線構成などを理解するとともに，三角形と四角形について興味を持ち，今後の学習につなげることができるようにすることをねらいとしていた。

ii）成果

○授業内での児童の活動を取り入れた点

授業の導入の部分で，児童が実際に三角形と四角形で動物の図を囲むという数学的な活動を取り入れていた。

児童は，積極的に手を挙げ，黒板に貼ってあった掲示物に書き込もうとする姿を見ることができた。また，その後の活動においても集中して取り組むことができていた。

○教材や教具の準備ができていた点

2年生ということもあり，教材や教具の大きさにも工夫を行った。児童が黒板に書き込みに来ることも想定し，大きさにもこだわり作成を

した。他にも，三角形と四角形の定義として直線で囲まれていることを児童から出させたかったので，青色の三角形と四角形の形をした画用紙と，黄色の紙テープを直線と見立てたものを用意した。そして，児童に3本の直線で囲まれていることと，4本の直線で囲まれていることを発言させた。すると，授業の中でもう一度三角形や四角形の定義についての発問を行うと，囲まれているという言葉が出てきた。

ⅲ）課題

○指示や発問が長い点

筆者は，子どもが分かるようにと思って，丁寧に説明しているつもりであったが，必要のないことを言ったり，次々に指示を出したりしてしまっているため，子どもたちにとっては，一体，何をしたらいいのか分かりにくくなっていた。

○子どもの活躍できる場を奪ってしまった点

今回の授業実践における課題の1つとして，子どもの活躍できる場を奪ってしまったことが挙げられる。児童にそれぞれの動物の家を囲ませる活動を行わせた後，めあてを児童から出せずに，「囲んでくれた中でなんか似ているやつと似ていないやつで分けてみないかな？」と教師から児童に対してめあてを出す形となってしまった。まとめの部分もめあてと同様に教師から出す形となってしまった。めあてやまとめを児童の方から出させるために，児童に対して，形に注目させながら，気付いた点などについて発表をさせる必要があったと感じる。授業内容に興味を持たせ，児童自身が活躍できる場面を授業内で取り入れることが重要であると考えられる。

○一つ一つの活動のつながりがなかった点

導入で動物の周りにある点をつなぎ，それぞれの家をつくるという活動を行った時は，子どもたちは実に意欲的に活動していた。しかし，ビデオ分析をしてみると，この活動の際，筆者は机間指導を行っていない。子どもたちは活動をしながら，「この点とこの点をつないで」とか「いち，に，三本で囲まれている」と言いながら，動物を囲んでいたかもしれない。けれど，その時の筆者は，授業を進めることに精一杯で，子どもたちの活動の際，教卓で次の活動の準備をしており，子どものそばにはほとんど行っていなかったことが分かった。さらには，「みんな囲めたかな。囲めたよね。先生，囲んでこれを切りました。」と発言し，筆者自身が切り取った図形を見せて，「形どうかな。」と子どもに問いかけてしまっている。子ども自身が囲んだ図形を確認し，その図形を使って授業を進めるのではなく，教師があらかじめ用意した図形と入れ替えてしまった。子どもたちが実際に囲んだ図形を確認し，その囲み方について尋ねていれば，「本時ではこれらの図形を仲間分けをしてみたい」「こうやって作ったから，三つの直線で囲まれている」と，めあてや，仲間わけの根拠となる発言が，子どもたちから出てきていたのではないかと考える。

⑵総合インターンシップⅠの授業実践

ⅰ）授業の概要

第6学年算数科「分数×整数，分数÷整数」の授業を実践した。本時では，分数÷整数を立式し，その計算の仕方を2つの問題を解くことを通して考えることで，分数を整数でわる計算は，分子はそのままでその整数を分母にかける方法の意味やよさを理解できるようにすることをねらいとしていた。今回の授業実践では，ミニホワイトボードを使い，班で話し合ったことをもとに面積図をホワイトボードに書き込み，

説明を行わせることで，問題の計算方法について全体で共有することを計画し，授業実践に臨んだ。

ii）成果

○授業の中で児童の活躍できる機会を設けた点

児童が考えをもつことができ，それを表せるようにするために，班活動を行い，ホワイトボードに話し合いの結果を書かせるようにしたところ，児童は，各班で話し合い，意見をもとに発表することができていた。

○ICTを用いた授業構成をした点

各班ごとに$\frac{4}{5}\div 3$の計算の仕方について個人で考えてもらったことをもとに話し合い，ホワイトボードに班として話し合った意見を書いてもらった。そのホワイトボードをもとに実物投影機を用いて班ごとの意見を提示したことによって，クラス全体で各班の考えを共有することができていた。

○考えを深めるような発問ができた点

「先生,疑問に思ったことがあるんだけど...」など児童に寄り添うような発問を行った。この発問を行った結果，児童は自分の考えをまとめて，言おうとする様子が見られた。

iii）課題

○児童の思考に沿った授業ができていなかった点

この授業の模擬授業を行った時や細案の作成時に考えていた,比べる量÷もとにする量=割合という言葉の式を出せていなかったため，「$\frac{4}{5}\div 2$」のようにしっかりと立式ができている児童も見られた一方で,「$2\div\frac{4}{5}$。」と答えてしまった児童もいた。

(3)総合インターンシップⅡの授業実践

i）授業の概要

第6学年社会科「ノルマントン号事件と条約改正」の授業を実践した。本時は，ノルマントン号事件を知り，不平等条約を結んだままの問題点について考えることで不平等条約の改正を願う人々の想いについて捉えることをねらいとしていた。

ii）成果

○児童の思考に沿った授業を実践できていた点

児童の振り返りに「細かいところまでしっかりと説明してくれて,すごく分かりやすかった。」など，関税自主権や治外法権の説明をしっかりと行ったことで授業が分かりやすかったという意見が見られた。また「条約はやっぱり改正しなきゃ，日本人がもっとぎせいになると思った...」など，不平等条約を当時の日本人の気持ちで捉えられているような意見も見られた。

このことから，今までの授業実践と比べ，社会科が苦手と感じている児童に対して，丁寧な説明を心がけたため，関税自主権や治外法権の内容については知識の定着を図ることができた。

iii）課題

○1つ1つの説明が長すぎた点

今回の授業実践において，関税自主権は前時までの既習事項であったので,「関税自主権ってどんなことだったかな？」などの発問を行い，児童の言葉で授業を進めていくべきだったと感じる。

○自分の意見を相手に伝えるための手立てを用意できていなかった点

今回の授業実践において，関税自主権や治外法権などの問題点を考えるために必要となる知識をまず定着させることに対して意識をおいて授業を進めてしまった。その結果，児童とのやり取りはあったものの端的な答えとなる発問しかできていなかった。児童自身の意見を相手に伝えるための手立てを十分に用意できていなか

ったと感じる。また，児童自身の意見を述べる所でもワークシートにただ枠を準備しただけであり，これでは，児童自身がどのように書いていけばよいのか分からなかったと考える。

○その他

さらに，上記の2点以外にも改善すべき点として，タイムマネジメントができていなかった点がある。授業の中において，本来時間をとるべきところは，条約改正における人々の気持ちについて考えたことをグループで共有し，班の中でまとめるところであった。しかし，実際の授業においては，グループの時間を十分にとることができなかった。自分の中では，内容を一つ一つ丁寧に行うことが，社会を苦手だと考えている児童にとっては分かりやすいのではないかと考えていた。しかし，内容を一つ一つ丁寧におさえることは，それぞれの活動が短くなることにつながっていく。今回の授業においては，前時までに学習していた関税自主権や治外法権については，教師が説明するのではなく，児童たちから表現をさせる方がよかったのではないかと考える。

3．今後の展望

筆者にとって，教職大学院で学ばせていただいた2年間はとても貴重で有意義な時間となった。教職大学院に学ばせていただく前には，学部で授業づくりや生徒指導，学級経営など何も分からない状況のまま過ごしてきた。しかし，この2年間で，授業づくりを始め，生徒指導や学級経営について教師としての基本的なことから学ばせていただき，実りのある2年間となった。

筆者がこの2年間の授業実践を通して成長したと感じたことを2点，以下に述べる。

1点目は，授業実践では，タイムマネジメントの問題もあり，活動の時間を多く取ることができなかったが，児童の姿を意識して細案や板書計画，ワークシートなどつくることができるようになったことである。学部の時や基礎インターンシップであれば，前後のつながりなどあまり意識せずに授業づくりに取り組んでいた。しかし，総合インターンシップⅠ・Ⅱにおいては，山場の活動を決めたら，意識して山場の活動から細案や山場までのそれぞれの活動を計画的に構成することができるようになってきた。

2点目は，視覚化された授業づくりについてである。これについても，基礎インターンシップや総合インターンシップⅠ・Ⅱを踏まえて徐々にできるようになってきた。実物投影機を活用し，児童が見やすくするのはもちろんのこと，タブレットを活用した授業づくりなど，児童が興味や関心を持ちやすい授業づくりに取り組むことができようになってきた。

2年間をふり返ってみると成長した部分もあったが，指示や発問が長い点やわかりやすいワークシートの工夫など，自分の研究主題である「誰もが分かる，できる授業を目指して」にはまだまだ課題が山積みである。「教師というのは，いつまでも学び続けなければならない。」と以前，ゼミの教授に言われたことがある。教壇に立ってからも，この言葉を胸に上述した3点を意識し，多くの授業を行い，助言を頂くとともに，他の教師の授業を見せて頂き，教師としての研鑽に励んでいく所存である。

参考文献

1) 小貫悟・桂聖（2014）『授業のユニバーサルデザイン入門　どの子も楽しく「わかる・できる」授業のつくり方』，東洋館出版社
2) 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年度版　告示）』